実 践 研 究 事 業

特色あるプログラムの開発・拡充と
施設の教育力向上に関わる調査研究　Ⅱ

－小学校低学年代におけるモデル的実践－

海の道　若狭湾

～　つながろう　そこにあるのは海と山　～

令 和 7 年 3 月

独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立若狭湾青少年自然の家

Ⅰ　はじめに

１．国立若狭湾青少年自然の家の周辺環境と伝統文化

国立若狭湾青少年自然の家（以下、当施設）は、若狭湾国定公園のほぼ中央に突き出た黒崎半島の一角に位置している。当施設の前面にはリアス海岸特有の美しく雄大な若狭湾が広がり、古くは東アジアから世界へつながる歴史と文化の玄関口となっていた。山にはクロマツやコナラ、ヤマザクラ、ヤブツバキなどが群生しており、眼下に広がる海には手つかずの自然の沢を通して栄養を蓄えた水が流れ込み、ホンダワラ科の海藻の群落や海中林が多く見られ、それらを住処にする生物も多く生息しており、まさしく「自然の家」にふさわしい、大自然が目前に広がっている。この好条件を生か、カッターやシーカヤック、スノーケリング、ハイキングやオリエンテーリングなどの海や山の自然体験を提供している。

２．研究の背景

国立青少年教育振興機構は、第３期教育振興基本計画（平成 30 年６月 15 日閣議決定）や「人口減少時代の 新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について（答申）」（平成 30 年 12 月 21 日）等の国の青少年教育行政に関する基本方針を踏まえ、ナショナルセンターとして、次代を担う青少年の自立に向けた健全育成を総合的に推進していくことが求められている。その際、青少年が社会の担い手となることを支援する拠点としての役割や、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた学校との連携強化を図る観点も重要であると考えられる。また、今後の地域における社会教育が目指す役割として、人づくり・つながりづくり・地域づくりの側面が示されており、学びと活動の循環が重要とされている。これらを踏まえた上で、国土強靭化基本計画によるリダンダンシー（広域防災補完拠点）としての防災・減災教育等の推進や子どもの貧困対策等の国の政策実現に向けた取り組みの推進や、利用団体への教育的支援の充実、家庭・地域の教育力の向上や体験活動の普及、地域との連携・協働の推進による地域貢献を重点事項と捉え、教育事業や研修支援等において体験活動をより一層推進することを目指している。

国立青少年教育振興機構第４期中期目標・計画（令和３年３月 30 日文部科学省認可）では、令和７年度の終了時に、全地方施設が研修支援において全国ナンバーワンと言える研修プログラムを提供できるよう、施設の個性化、高度化、拠点化を目指した特色あるプログラムや国の政策実現に向けたプログラムの開発及び拡充が求められている。そこで当施設主催の教育事業で行った内容を活動プログラムに落とし込むなど、利用団体に提供できるように工夫する必要がある。

特色あるプログラムは、各施設の設定した教育テーマに基づき、教育事業と研修支援を連動させながら、地域から理解・認知され、活用されるプログラムの開発・拡充を行っていくことが求められている。

Ⅱ 本研究の概要

１．教育テーマと仮説

当施設では、**教育テーマ**を「**豊かな海を守るため、身近な私たちの生活の中から改善していく方法を一緒に考えるプログラムを開発する。**」とし、若狭湾を取り巻く自然や文化、歴史、産業に着目し、持続可能な地域づくりに寄与した自立した青少年を育成することを目的とした。**研究の仮説**を「**特色あるプログラム開発・拡充を進めることで、環境について考える、自立した青少年の育成に寄与する。**」とし、令和３年度、令和４年度には幼児、小学校低学年、小学校高学年から中学生、高校生の各年代を対象に４つの教育事業を研究の対象として設定し、事業共通の効果測定の方法として、IKR アンケートを用いて事業参加者の事前事後での変容を調査・分析した。なお、IKR アンケートでは、下表の各項目を育成したい資質・能力にあてはめ、事前事後の平均値の差をみることで評価とした。

- 探究的な興味関心の日常化（学びに向かう力・人間性）
- 自己実現・自己成長（知識・技能）
- 課題に向き合う力（思考力・判断力・表現力）

これらの項目について、各年代で事業参加者の平均値が、事前と比較して事後が高値を示し、体験活動や集団生活を経験することで、資質や能力の向上につながっていることが推察された。

上記、令和３年～４年の調査研究については、令和５年３月に発行した「特色あるプログラムの開発・拡充と施設の教育力向上に関わる調査研究」を参照いただきたい。

令和５年度では、小学校低学年代に焦点を当て、学

習指導要領で育成を目指す資質・能力の三つの柱である、

①	学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養
②	生きて働く「知識・技能」の習得
③	未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」の育成

を念頭に置き、「探究的な興味関心の日常化」「自己実現力・自己成長力の涵養」「課題に向き合う力の育成」を目指し、教育事業を展開し、特色あるプログラムの開発・拡充を進めた。

２．本研究の対象事業

令和５年度における海の特色化に関わる研究事業では、これまでの４事業から小学校低年齢期を対象とした「僕らは勇者だ！わかさわんキッズ冒険隊」に焦点を絞り、低年齢期のスノーケリング・海遊びの研修支援の充実と体験活動の効果を評価することとした。

「ぼくらは勇者だ！わかさわんキッズ冒険隊」概要

（１）目的

- 若狭湾での自然観察を通して、海と山のつながりについて考える。
- 自然の中でさまざまなチャンレンジをすることで、自分にできることや友達の良さを見つける。

（２）日時

令和５年７月２２日（土）～２３日（日）（１泊２日）

（３）参加者（応募者　１３５名）

	男	女	合計
小学１年	４名	４名	８名
小学２年	４名	４名	８名
小学３年	４名	４名	８名
合計	１２名	１２名	２４名

（４）主なプログラム

１日目　海と山のたんけん（生き物かんさつ）
　　海と山の生き物のお話
２日目　海の中をのぞいてみよう！
　　（スノーケリング）
　　ふりかえり

（５）講師

海の生き物についての知識やスノーケリングの技術を身につけ、深めるために、白井芳弘氏（名古屋 ECO 動物海洋専門学校講師）に講師を依頼した。白井氏は、当施設の運営協議会委員でもあり、長年、当施設の運営や他の事業にも関わっていただいている。

また、普段から白井氏の下で、海活動の技術や知識を学んでいる名古屋 ECO 動物海洋専門学校の生徒にも、海活動のサポートを依頼した。

（６）プログラムデザイン

- 白井氏には、スノーケリング活動をはじめ、海遊びや生き物のお話しなどを担当いただき、海と生き物について楽しく学べる機会とした。
- 自分の手で実際に生き物に触れる体験の機会を意図的に設け、興味・関心を高める活動とした。
- 「わかさわんはっけんノート」を活用し、若狭湾の海や山での気づきを児童一人一人の言葉で書くようにした。
- 最終日には、「海」をテーマに絵を描き、描いた絵を使って２日間の振り返りの機会を設けた。
- グループごとに振り返りを行い、初めてできたことや挑戦したことを自分の言葉で発表することで活動を深める機会とした。
- 学んだことや思い出を振り返ることができるよう、若狭湾の海で見ることのできた生き物を水槽で展示することとした。
- 職員に加え、自然の家の大学生ボランティアスタッフ５名と名古屋 ECO 動物海洋専門学校の学生 12 名がサポートした。自然の家のボランティアは、本年度のボランティア養成セミナー参加者であり、安全への意識や海活動の技術を身に付けているスタッフを起用した。
- 各グループに１人のボランティアがつき、活動中の児童の安全管理や生活補助を行った。
- ボランティアに初日のアイスブレイクを企画してもらったことで、児童との距離を縮めたり、グループの仲間との交流ができる時間とした。

３．実施体制

事業の企画・運営の主担当は、企画指導専門職が担い、過去の事業担当実績を鑑み、本研究の理解と高度化が進むように配慮した。また、企画指導専門職会議を設け所内全員で事業に取り組む意識をもち、進捗状況を確認すると共に、研究の方向性を確認した。

事業主担当者がファシリテーション能力を発揮し、事業の見える化、講師との連携を明確に示し、余裕を

もって事業企画や準備等に取り組めるようにした。

４．効果測定の方法

（１）事業参加者変容の客観的評価

連想法による言語活動・描かれる絵の変化

参加者に事前事後で①「海」をイメージした絵を描くこと、②「海」から連想する言葉を書き出す活動結果から参加者の変容について調査・分析を行うこととした。

（２）参加者の学びの評価

「わかさわん　はっけんノート」

山（沢）と海の様子や採取した生き物を一人ひとりそれぞれの言葉でまとめる「わかさわんはっけんノート」を作成し、活動前後に記入する時間を設けた。参加者の記述から、森と海のつながりの理解度を調査・分析をした。

（３）記述式アンケートによる評価

事業最終日に参加者に、事業で学んだことについてのアンケートを実施した。

Ⅲ　結果及び考察

（１）事業参加者変容の客観的評価

（連想法による言語活動・描かれる絵の変化）

①【海】から連想するもの（言葉）

事前

広い、深い、青い、魚、暗いなどの抽象的な表現が多かった。

事後

ウニがいる、ウニは岩の隙間に隠れている、ウニは海藻を食べる、ヒトデは裏に口があるなどのスノーケリング活動で実際に見た具体的な様子が言語として表現された。

②【海】から連想するもの（絵）

事前・事後の絵を比較し、描かれている様子を客観的に評価した。

自然の家職員の評価

- 事前の【海】は想像の海が描かれていることが多く、事後の【海】は実際に観察した海が描かれていた。
- 全体的に、ヒトデやウニが事後の絵には描かれていることが多く、事業で触れた生き物が表現される傾向にある。
- 参加者が客観的に見ている海の外からの絵から、海の中、海の生き物の絵へと変化している参加者が多い。
- 事後の絵は、海藻が描かれていたり、ウニが岩場にいたり、太陽の光が何かしらの影響を与えているような絵があり、生態系を無意識に捉えた絵に変化している。

講師（白井氏）の評価

参加者 A さんの絵

太陽の光が海に入り、緑の海藻にあたっている。この海藻は、海の活動エリアに生えていたアオサである。海底には、オレンジ色の体に緑の模様が入ったイトマキヒトデと黒いムラサキウニがいる。森とのつながりは出てこないが、太陽が海藻を育てる生き物のつながりの一部が描かれ、印象に残ったヒトデを正確に表している。

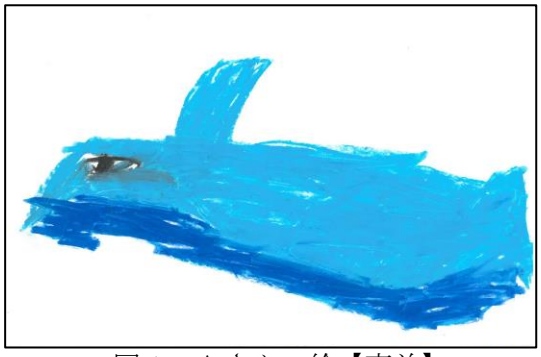

図１　A さんの絵【事前】

図２　A さんの絵【事後】

参加者 B さんの絵

ウニの下側に口が描かれ、緑色のアオサを食べている。ウニが海藻を食べることの話が印象に残っているのであろう。生き物のつながりを海の活動を通して学ぶことができている。

図３　Ｂさんの絵【事前】

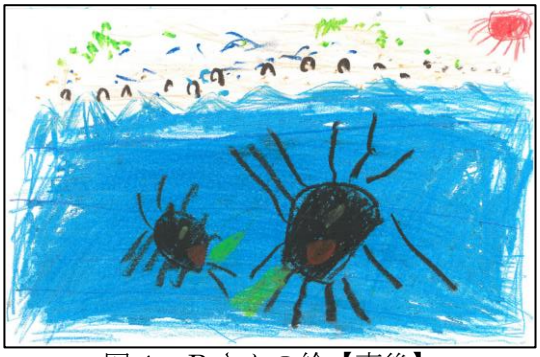

図４　Ｂさんの絵【事後】

参加者Ｃさんの絵

海底に、緑色のアオサと紅色のマクサのような海藻が描かれている。活動エリアには、緑藻・紅藻・褐藻が生えており、海藻の色をよくみている。右端にアオウミウシが描かれている。鰓が赤いのでよく観察している。この絵のポイントは、環境をしっかりとらえていることである。岩の表面に付着生物がつき、岩の色も一様ではない。ウニは岩の隙間に生息しヒトデは岩の上にいる。生物の生息状況がわかる絵が描かれている。

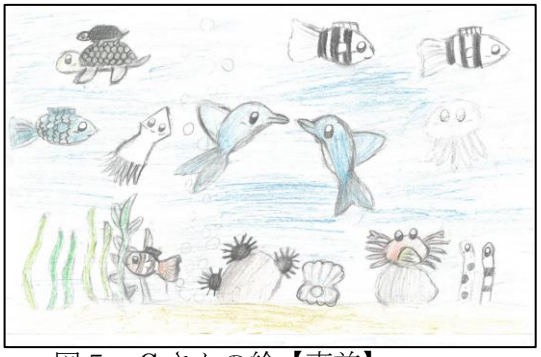

図５　Ｃさんの絵【事前】

図６　Ｃさんの絵【事後】

（２）参加者の学びの評価

（わかさわん　はっけんノート）

探究的興味関心の日常化

- 海の中でヒトデを探すのを頑張りました。
- 海の生き物と触れ合うのが楽しかった。
- 沢にいる生き物を捕まえるのを頑張った。
- スノーケリングで知らない生き物が分かりました。
- 海遊びやスノーケリングで魚がいっぱい見れた。
- 海と山はつながっていてすごい。

事業を通して一定の効果を上げられたと考える。「海に入って魚を見たこと」や「沢にもたくさんの生き物がいた」などの声が多かったことから、事業の中心である海・沢活動を通して【自然への関心】が高まったと考える。また、本事業テーマの一つである【海遊びや沢遊び、スノーケリング活動を通して、海の豊かさを体感し、海や生き物に興味・関心をもってもらうこと】を中心に据え、山と海のつながりを実感できるプログラムをデザインし、海遊び→生き物のお話→スノーケリングと段階を踏むことにより、児童の沢や海の生き物に対する興味・関心も段階的に引き上げることができたと考える。

自己実現・自己成長

- みんなで生き物をさがした。

・　生きものをいっぱい捕まえられるようになった。
・　ウニやヒトデを触れるようになった
・　初めての友達と仲良くなれた。
・　みんなで協力して部屋をきれいにした。

これまでの実体験の中で、触れる機会の少なかったであろう生き物に対して、その方法を知ることで、生き物に直接肌で触れる体験ができたと考える。講師やスタッフ、ボランティア学生のサポートがその体験機会を提供することにつながった。

生活面では、「みんなで協力して部屋をきれいにしたこと」、「みんなで手分けして生き物を探したこと」など、「みんなで～をした」ことを事業で頑張ったことに書いている児童が多かったことから、集団で一つのことに向けて取り組むことの大切さを学び、思いやりの気持ちをもつことにつながったと考える。

課題に向き合う力

・　布団を片付けるのをみんなで協力した。
・　海で友達を助けることができた。

参加者アンケートへの記述には、「みんなで～をした」「困っている子を手伝った」などの記述があり、慣れない集団生活の中で、子どもたちなりに助け合う姿が見られた。思うようにいかないことを経験し、その中で課題に直面したことで、仲間を思う気持ちや、仲間を頼る気持ちが芽生えたのではないだろうか。

これらのことから、事業を通して、課題に直面した時の対処方法や、一人では解決できないことに対する対処方法を考えることができるようになったのではないかと考える。

ボランティアからの声（事業後に聴きとり）

・　初めはなかなか班に馴染めなかった子も、活動をするにつれて友達と海や山の活動を楽しんでいた。
・　各グループの小学３年生を中心に次の活動や時間の声掛けをしている姿が多く見られた。
・　夜の生きもののお話の時間や帰りに水槽を展示したことで、白井氏や子ども達同士で生き物についての会話が自然と生まれていた。実物を見れることは、子ども達の興味関心を引き出すきっかけになるのだと思った。

【課題】

本事業は対象が小学校低学年（小学校１～３年生）であり、事業内容の難易度を少し高く設定してしまった。海と山が沢でつながっていること、沢には生き物がいること、海には多くの魚や生き物がいることの理解はできていたように感じたが、沢の水には多くの養分が含まれていることや沢の水が海を豊かにしていることの理解は小学校低学年には難しかった。講師の白井氏に、低学年児童に対してわかりやすく説明していただいたが、沢や海の生き物を見つけ、触れたという印象が子どもたちには強く残っていたようだ。そのため、施設のプログラムとして提供する際には、対象の発達段階に応じて、内容を簡易的にすることや、アプローチの仕方など考慮して活動の提供ができるよ

うにしていく必要がある。

Ⅳ 事業の成果を踏まえた活動プログラムの開発

１．目的

第４期中期目標・計画では、研修支援においてより多くの施設利用者が活動プログラムで利用するといった、特色あるプログラムを提供できることを目指しており、施設のプログラムを「個性化・高度化・拠点化」していくために、教育事業での成果を研修支援に活かすため、若狭湾の自然環境の特色である海と山の繋がり学ぶことができる活動プログラムの開発を行なった。

２．方法

令和４年度に実施した教育事業「森の声キャンプ」と前述の令和５年度「「ぼくらは勇者だ！わかさわんキッズ冒険隊」で実施したプログラム（海と山の生き物観察・海と山の美術館）を基に、白井氏に協力を依頼し、助言をいただきながら新プログラムの開発を進めた。活動資料の作成にあたっては、名古屋 ECO 動物海洋専門学校の学生にも協力を得ることができた。

開発したプログラムの主な対象は小学５年生であるが、教育事業の実績として低学年を対象とした実施事例もあることから、発達段階に応じた対応についても検討できる。

３．新規開発プログラムの実際

新規開発プログラム名

トビーのわかさわん探検隊（以下 TWT）

活動の概要

海と森で囲まれた若狭湾の自然を各ポイントを巡りながら全身で体感する。グループで協力し、楽しみながら海と森のつながりや自然への関心を高める。

活動のねらい

・海と森の自然を五感で体験する。
・若狭湾の自然を楽しみながら、海と森の繋がりに触れる。
・グループで協力して活動することを通し、仲間の大切さを実感してもらう。

ふりかえりの視点

・ 自然の中でどんなことを感じたのか共有する。
　例）見つけたモノや見た景色等について共有する。
・ 海と森の繋がりについて知ることができたか共有する。
　例）どんな所に繋がりを感じたか、海と森の違いなどを共有する。
・ 自然のために自分たちができることは何か共有する。
　例）学校や家庭で取り組めそうなことを考えて共有する。
・ グループで協力して活動を進めることができたか共有する。
　例）どのようなことを協力できたか、協力するために意識したことは何かを共有する。

※ 指導者は指導者用ワークシートを参考にふりかえりの助言をする。

４．今後の展望

本プログラムの開発は、学習指導要領で育成を目指す資質・能力の三つの柱を読み替え、

ア）自然の中で思い切り遊んだり、生活したりすることを通して**他者や海とのコミュニケーションを図る**こと
イ）海遊びやスノーケリング活動を通して、海の豊かさを体感し、海や生き物に**興味・関心**をもってもらうこと
ウ）自然の中での様々な**チャレンジ**を通して、自信をつけてもらうこと

をテーマに進めた。

教育事業の対象である小学校低学年の利用は、当施設ではほとんどないため、活動プログラムの開発については小学校４年生以上を対象として検討を進めた。幼児や低年齢期からの体験活動の重要性がさけばれているため、今後は、低学年児童向けのスノーケリングや海遊びなどについても、研修支援プログラムに落とし込んでいくことを検討したい。

本研究での海の活動は、事業に関わる指導者の人数や支援するボランティアスタッフなど専門性の高い人材を起用したことで展開できている。これを機に他の研修支援プログラム（シーカヤック、ボート活動）の安全管理を含めた質の向上、指導する職員のスキルアップを見通した研修体制などを再考する必要があると考える。

さらに、本プログラムの体験内容が学校教育での学

習内容に応じた展開ができるよう、TWT を実施した団体からのフィードバックを受けながら、海と森のつながりや、豊かな自然について学びを深められるプログラムへとより良い改善を繰り返し、当施設の特色である海と山を活かした活動プログラムを展開していきたい。

謝辞

国立若狭湾青少年自然の家における特色化プログラムは、これまで在籍した若狭湾職員の実践が基となっている。脈々と受け継がれる体験活動の有効性の調査と評価は、次代の子ども達の体験活動に引き継がれているだろう。びわこ成蹊スポーツ大学の中野氏、名古屋 ECO 海洋動物専門学校の白井氏、やまなみ保育園元園長の大森氏、グランストリーム代表の大瀬氏には長年に渡り、若狭湾の体験活動に理解をいただくと共に、助言と指針をしていただいている。また、若狭湾の実践は、地域の協力と理解、若狭湾の職員の協力のもとで成り立っている。ここに記して御礼を申し上げる。

付帯資料

- 令和５年度教育事業「僕らは勇者だ！若狭湾キッズ探検隊」事業報告書
- 研修支援プログラム「トビーのわかさわん探検隊」資料
- 第４期中期目標・計画における特色化に関する基本的な考え方について
- 特色あるプログラムの開発・拡充に向けて　構想図
- 特色あるプログラムの開発・拡充と施設の教育力向上に関わる調査研究（令和５年３月発行）

特色あるプログラムの開発・拡充と施設の教育力向上に関わる所内の取り組み

―小学校低学年代におけるモデル的実践―　・・瀧川　大輔・・

要約

施設の研究について紹介する。我々は、若狭湾の環境を生かした教育を考え、その教育を特色化事業と呼ぶ。この研究は、企画指導専門職２名、事業推進係１名が携わった。本年度は、小学校低学年代を中心に研究を進めた。本研究のテーマ、仮説を下に、それぞれの事業に課題を設定して研究した。令和６年度の成果と課題を報告する。

連絡先（国立若狭湾青少年自然の家　企画指導専門職・事業推進係）

瀧川　大輔　　島田　翔太　　馬場　裕子

〒917-0198　福井県小浜市田烏区（たがらすく）大浜　国立若狭湾青少年自然の家

TEL 0770-54-3100　FAX 0770-54-3023　Mail wakasawan@niye.go.jp